

A-11 Rey Auditory-Verbal Learning Testを用いた側頭葉てんかん患者の記憶学習機能の検討

葛飾橋病院¹、東京大学医学部精神医学²

○永久保昇治¹、畑哲信、福田正人、橋本大彦²

【はじめに】側頭葉てんかん患者において記憶学習機能の検討が多く行われているが、対象とした患者や用いた課題の特徴の違いによって結果は必ずしも一定しない。そこで本研究では記憶学習課題としてRey Auditory-Verbal Learning Test(RAVLT)を用いて側頭葉てんかん患者の記憶学習の特徴を検討した。

【対象と方法】対象は側頭葉てんかん患者 9 名(E 群、平均 39.8 ± 10.5 歳)、発作間欠期に幻覚妄想症状を呈した側頭葉てんかん患者 4 名(P 群、平均 31.0 ± 4.6 歳)、分裂病患者 10 名(S 群、平均 36.6 ± 10.1 歳)、健常対照者 21 名(N 群、平均 37.4 ± 9.6 歳)。Mini Mental State Examinationを行い明らかな痴呆症状を有する症例を除外した。記憶学習機能は単語リスト記憶課題であるRey Auditory-Verbal Learning Test(RAVLT)の日本語版(演者らが作成)により行った。このテストは① 15 個からなる単語リストの再生を 5 回反復、②別の単語リストの再生を 1 回(干渉刺激)、③最初の単語リストの再生をさらに 1 回、④ 5 分後に単語リストの再認を順に行うもので、再生時の正答数、誤反応数(単語リストにない反応を示した数)、干渉効果(再生 5 回目の正答数から再生 6 回目の正答数を減じた数)、再認について評価した。

【結果】(1)再生 1 回目から 5 回目までの正答数の合計は E 群 55.8 ± 5.5 、P 群 36.0 ± 0.7 、S 群 39.8 ± 6.6 、N 群 54.9 ± 9.0 であり、P 群、S 群ともに N 群より成績が低かったが、E 群は N 群とほぼ同等の成績だった。干渉効果は E 群 1.5 ± 1.8 、P 群 2.0 ± 1.2 、S 群 2.1 ± 1.7 、N 群 1.8 ± 1.8 であり、全群あまり差がなかった。再認は E 群 0.96 ± 0.06 、P 群 0.69 ± 0.28 、S 群 0.82 ± 0.07 、N 群 0.91 ± 0.15 であり、P 群、S 群ともに N 群より成績が低かったが、E 群は N 群とほぼ同等の成績だった。(2)誤反応数は E 群 1.6 ± 1.4 、P 群 4.0 ± 3.7 、S 群 9.2 ± 11.4 、N 群 0.4 ± 0.8 であり、S 群、P 群、E 群、N 群の順に誤反応数が多かった。

【まとめ】(1)RAVLT の再生成績により反映される記憶学習機能は P 群、S 群でその障害が強かった。(2)本課題で検討した E 群の記憶学習機能は N 群とほぼ同等の成績だった。(3)誤反応数は S 群、P 群で多く認められた。

A-12 側頭葉てんかん患者におけるIMP-SPECT 所見とウィスコンシン・カード・ソーティング・テスト検査成績の比較検討

*福島県立医科大学神経精神科

**福島県立医科大学放射線科

***安積保養園

○管るみ子*, 山本佳子*, 上野卓弥*, 上島雅彦*, 宮本百合子*, 渡部学*, 高橋留利子***, 丹羽真一*, 矢野文男**

我々はてんかん患者におけるSPECT 検査上の低血流域が認知や記憶の機能に影響を与える可能性を探り、第28、29、30回の本学会でIMP-SPECT 所見とウェクスラー知能検査、ベントン視覚記憶検査、ウェクスラー記憶検査の成績を比較検討して結果を報告してきた。今回我々は側頭葉てんかん患者におけるIMP-SPECT 所見のROI値のLaterality Index (LI)と前頭葉機能の検査法とされるウィスコンシン・カード・ソーティング・テスト検査成績、複雑部分発作の発作頻度を比較検討したので報告する。

<対象と方法>

症例は当科外来通院中の側頭葉てんかん患者38名で、性別は男性25例、女性13例、平均年齢 32.3 ± 12.7 歳であった。罹病期間の平均は 14.2 ± 11.1 年、複雑部分発作の一年間の発作回数の平均は 27.5 ± 42.3 回であった。

IMP-SPECT 検査結果は基底核を通るスライス面における左右の前頭葉、側頭葉、後頭葉のROI値を計算した。左のROI値から右の対称部位のROI値を引き、左右のROI値の和で除したものをLIとし、この数値が正の場合を右低血流群、負の場合を左低血流群とした。このLI値とウィスコンシン・カード・ソーティング・テスト検査成績、複雑部分発作の発作頻度の相関をみた。有意水準は0.05とした。

<結果>

1. 左前頭葉低血流群(N=21)において、発作回数とLIに負の相関がみられた($r=-0.5819$, $p<0.01$)。すなわち発作回数が多い程血流が低下する傾向がみられた。
2. 右前頭葉低血流群(N=17)において、PEM(達成された概念の保続傾向)とLIに正の相関がみられた($r=0.4830$, $p<0.05$)。すなわち血流が低下する程保続が増加する傾向がみられた。
3. 右側頭葉低血流群(N=17)において、IVR(言語と行為の解離)に正の相関がみられた。すなわち血流が低下する程IVRが増加する傾向がみられた。

<まとめ>

SPECT 検査上の前頭葉と右側頭葉の低血流域が前頭葉機能に影響を与えている可能性が示唆された。